

福岡県における藻場・干潟ビジョンの考え方

篠原 直哉・山田 京平^a・大形 拓路
(水産振興課)

水産庁は平成29年度から33年度を計画期間とする漁港漁場整備長期計画を新たに定め、この中で水産資源の回復・増大を目的とする「藻場・干潟ビジョン」の策定指針が示され、福岡県も策定に着手した。本県は、筑前海、有明海、豊前海と特徴の異なる3つの海域があり、各海域毎にビジョンを策定する必要がある。本報告では藻場を中心とした筑前海と干潟を中心とした有明海の各ビジョンについて考え方を報告する。

筑前海は外海に面し、海岸や離島周辺にアラメ類やワカメ、ホンダワラ類などが優占する藻場を形成している。福岡県では自然石の基質を投入し、藻場の造成を目指す漁場造成手法（ハード整備）を継続しており、このときに考慮すべき藻場の形成条件は海藻類が着生する安定した基質などの物理条件と水温や透明度などの環境条件である。また、藻場の維持にはウニ類など植食性動物の生息量と海藻量のバランスが重要である。近年、地元の漁業者による海藻減少の原因となるウニ類の駆除などのソ

フト対策が藻場の形成を促していることから、国の補助事業などの活用により、これらの活動を進め、筑前海沿岸の藻場の造成を目指すことも必要である。

有明海は広大な干潟を有し、多種多様な固有種が生息する独特な特徴をもつ海域であり、この干潟には二枚貝類をはじめ、多くの生物が生息している。近年みられる干潟の泥質化への対応として、本県では覆砂による漁場造成手法（ハード対策）を取り入れ、底質環境の改善につながっている。近年、覆砂した漁場にあさり稚貝が大量に発生しており、これらの保護のために、地元漁業者による移植、密漁監視、資源管理などのソフト対策が積極的に行われ、資源量が増加し漁獲に結びついた。今後も、この手法をもとに福岡県有明海における覆砂漁場でのあさり資源の活用を図っていく。また、有明四県はこれまであさりなどの共通資源を共同して利用してきたことなどから、共同でビジョンの策定を目指す。

水産工学, 55(1), 71-75 (2018)

a 現所属：有明海研究所